



図書館郷土資料室
☎21-61111 内線6201

好生堂版『孝経』

医学校好生堂で出版
孝行の道を説く教科書

今回は、米沢藩医学校の好生堂で出版された書籍『孝経』を紹介します。図書館では「林泉文庫」「興譲館本」等に数点所蔵しています。孝経とは、儒教の教えを書いた経書の一つで、孔子が門人の曾子に語り聞かせる形式で孝行の道を説いています。

その中の「身体髪膚、これを父母に受く。敢て毀傷せざるは、孝の始めなり。身を立て道を行い、名を後世に揚げ、以って父母を顕わすは、孝の終り



▲好生堂版『孝経』の表紙と本文第一章。上部に「太室曰（いわく）」で始まる注が付く。

渋井太室の頭注

孝経は、江戸時代は孔子の教えを書いた論語とともに最初に学ぶ書籍で、藩校興譲館では十歳頃から通い始める通学生の教科書でした。当時、各藩の藩校では独自の教科書として出版するようになり、庄内藩の藩校「致道館」では論語・孝経・大学等を印刷しています。

この孝経も、その奥付に「米沢 好生堂蔵版」とあり(写真左)、享和二年三月(一八〇二)に米沢藩医学校の好生堂の名で出版されたことがわかります。また、米沢の児童のため、大町の商人舟山氏が企画し、飛帰氏が版を彫り、小関氏が協力して印刷販売したことも書かれています。

好生堂版の特色は渋井太室による頭注が付いている点です。太室は佐倉藩



の儒学者で、上杉鷹山の先生でもありました。この鷹山と太室の師弟関係から、太室の注を用いたと思われます。

米沢の印刷技術確立を示す資料

米沢での木版印刷の歴史は、寛政七年(一七九五)に疱瘡が流行した際、江戸より名医を迎え薬の使用法を書いた印刷物を配布した記録が初見です。次いで享和元年に、農民・町民に対する

捉書を木版印刷して配っています。そして、享和二年に『孝経』が出版され、同年十一月には『かてもの』が印刷され領内に配布されました。『かてもの』の版木を彫ったのも同じ飛帰氏です。この『孝経』と『かてもの』は、米沢で印刷・出版が出来るようになった事を示す歴史資料でもあります。

郷土資料の小径

最近出版された郷土関係書籍

『直江兼続』

江宮隆之著 学研M文庫

戦国の世を堂々と生きた兼続の生涯を描いた作品。各場面には兼続の詠んだ漢詩をちりばめ、文武に優れた姿も紹介する。

また、これまでの兼続像とは違った視点での解釈も。